

小学校体育科における学習集団の編成に関する検討 -態度得点が異なる教師の意識の違いから-

本学教育学部	林 修
本学附属小学校	則藤 一起
	松原 千夏
田辺市立田辺第三小学校	塩路 文哉
和歌山市立雑賀小学校	山岡 大祐
田辺市立上芳養小学校	松葉 貴士
海南市立下津小学校	熊代 悟志

I はじめに

私たち教師は、授業で小集団での学習を展開しようとする場合、学習集団をどのようにして編成しようかとあれこれ考えます。ここでは、学習集団の数やそれぞれの人数、構成メンバーなどについて、子どもの学習レディネスの違いやリーダーシップの有無、人間関係の緊密度などを考慮しながら編成することになる。

その結果、編成した学習集団がリーダーになる子ども、ふつうのレベルの子ども、手のかかる子どもなどを均等に振り分ける「グループ内異質-グループ間等質」といった異質集団になる場合と、興味・関心別のグループ（目的別集団）や能力の似通った者同士のグループ（能力別集団）といった同質集団になる場合の2種類のケースが考えられる。

実際には、これら2種類の学習集団のうち、前者の異質集団を用いて授業を行っている場面を見ることが圧倒的に多い。これには、一人ひとりの感じ方や考え方の違いから生まれる話し合いを活用して、集団思考を高め、結果的に学級集団の育成へと繋げようとする教師の願いが込められているからではないだろうか。この点から、小学校の先生が体育の授業で小集団を用いて学習する場合にどのような考えで学習集団を編成して、授業を展開しているのかについて直接伺うことにした。今回は、和歌山市内、田辺市内で協力を得られた先生にお願いして、態度測定の実施と学習集団の編成に関する考え方をインタビューすることができたので報告する。

II 資料の収集

1. 対象教師

和歌山市並びに田辺市の小学校教諭7名

2. 調査時期

令和3年11月上旬～12月上旬

3. 資料の収集

(1) 児童の体育授業に対する愛好的態度の測定

小林（1978）が作成した小校高学年用の態度尺度をもちいて態度測定を行い、対象とした先生方が担任する学級の児童の体育授業に対する愛好的態度を把握した。

(2) 学習集団の編成・運用に関する意識 (インタビュー)

対象とした教師7名に対して、「これまでの体育の授業で、個人種目を教材とした場合の学習集団の編成・運用に関して留意してきたこと」についてインタビューを行った。

表1 態度測定の診断結果

学級	男子	女子
A	高いレベル	高いレベル
B	高いレベル	高いレベル
C	高いレベル	高いレベル
D	高いレベル	アンバランス
E	やや低いレベル	普通のレベル
F	かなり低いレベル	高いレベル
G	低いレベル	低いレベル

III 実践の結果と考察

1. 態度測定の診断結果

表1は、態度測定の診断結果を示したも

のである。

診断結果は、大きく2つに大別された。すなわち、男女とも「高いレベル」と診断された学級が3学級（A、B、C）、診断に男女で差異が認められた学級が3学級（D、E、F）であった。なお、他の1学級は、男女とも「低いレベル」にとどまった。

男女で差異が示された3学級のうち、D学級は男子の方が高く、EとF学級は女子の方がそれぞれ高い結果であった。

これらの診断結果は、学習集団の育成も含めた総合診断であるため、30項目の意見項目の中から学習集団の育成に関わると捉えられる8項目を取り出してそれぞれの特徴を検討することにした。

表2は、その結果を学級ごとに示したものである。

まず、診断結果が男女とも「高いレベル」と診断されたA、B、Cの3学級では、男女ともに、ほぼ全ての項目において「標準以上」であった。

次に、診断結果に男女で差異が認められた3学級をみると、D、C学級では、どちらかというとも男子の方が女子よりも「標準以上」の診断が多い結果であった。これに対して、F学級では、女子の方が男子よりも著しく高い結果であった。すなわち、女子は8項目全てで「標準以上」と診断されたが、男子は「標準以上」が1項目にとどまり、逆に「標準以下」の項目が4項目取り出された。

なお、態度得点の診断結果が、男女とも「低いレベル」にとどまった学級では、男女それぞれで「標準以上」と診断された項目は1項目のみであり、「標準以下」が男子で6項目、女子で3項目取り出された。

2. 学習集団の編成に関する意識

これまでの態度測定に関して数多くの知見が生産されている^{注)}。

それらの中で、態度得点には、学習形態の影響が強く、とりわけ、教授活動の果たす影響が大きいとされている。すなわち、教師主導の一斉的な学習よりも小集団的な課題解決的学習の方が態度得点が高まりやすいことが認められている（梅野・辻野、1980）。また、態度と学習集団の関係について検討され、学習集団機能のレベルを高めれば態度得点も高まることが認められている。

さらに、学習集団機能と授業中の教師行動との関係を検討した結果では、学習集団機能が高かった学級では、そうでない学級に比べて、「発問（創意的）」、「肯定的フィードバック（技能的）」、「肯定的フィードバック（認知的）」、「励まし（技能的）」の使用頻度がいずれも有意に高かったことが報告されている。

これらの成果は、教授活動の違いが学習集団機能や態度得点の違いとなって現れることを示すものである。そこで、今回得られた態度得点（特に学習集団）の違いが、学習集団に関する教師の考え方の違いによるものかどうかについて探ってみることにした。

表3は、先生ごとに聞き取った内容をまとめたものである。

学習集団に関わる項目点の診断が男女とも高かったA、B、Cの3学級を担当する教師とそれ以外

表2 学習集団に関する意見項目の診断結果

学級		A		B		C		D		E		F		G	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
5	集団生活の楽しみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○		×	○	×	
6	友達を作る場	○	○	○	○	○	○	○		○		×	○	×	×
16	協力の習慣	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	×	×
21	チームワーク発展	○		○	○	○	○	○		×	×		○	×	○
22	みんなの活動	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○		
23	みんなのよろこび	○	○	○	○		○	○	○	×	×	×	○	×	×
24	利己主義の抑制	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	
25	永続的な仲間	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	

注) 図中の○印は「標準以上」、×印は「標準以下」診断をそれぞれ示したものである。

表3 対象とした教師の学習集団の編成に関する考え方

<p>【A 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉、班別、ペア学習、グループ学習等、子供たちにつけたい力によっていろいろな形で学習を進めている。 ・グループ学習の際は児童が取り組みたい技を選ばせ、<u>技能レベルの似ている子同士のグループ（同質集団）を組むことが多い。</u> ・ウォーミングアップや基本的な技を習得させたい場合などはペア活動を用いることが多く、その際は男女別の並び順でペアを作る。 ・グループでの学習では、運動が苦手な児童への支援を重点的に行い、運動が得意な子には授業の冒頭で「挑戦」を促し、自分たちで活動させることが多い。 <p>【B 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じめあて同士の目的別集団（同質集団）やできそうな技（もしくはできる技）に挑戦する能力別集団（同質集団）を学習内容によって使い分けている。特にできそうな技（もしくはできる技）に挑戦する<u>能力別集団を用いることが多く、グループのメンバーは流動的である。</u> ・学習班は体育の授業ではほとんど用いない。ペア（子供たちが決める）での学習を取り入れることがある。 <p>【C 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的に男女混合の異質集団を用いて、グループ学習を行う時（グループのメンバーは單元ごとに教師が決める）と必要に応じて<u>同じ能力や同じ課題同士の等質グループを用いている。</u> ・その授業、單元で何を指すかによって、どのようなグループを作り用いるかを考えるようにしている。 <p>【D 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉、班別学習を行うことが多い。 ・班別学習の際は、ほとんど<u>出席番号をもとにした班（異質集団）を用いている。</u>また、<u>基本的に男子ばかりの班、女子ばかりの班を用いることが多い。</u> ・<u>女子に運動が苦手な子が多いので、班別活動の際は女子に指導に行くことが多い。</u>男子は自分たちでアドバイスをしあっている子が多いので、子どもたちに任せている。 ・技の見本を見せる際、<u>男子にお手本をお願いすることが多い。</u> <p>【E 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一斉、<u>班別学習の形をとることが多く、教師主導で班別の学習を進めることが多い。</u>子どもたちに技のできぐあいを確認しながら、技能別で班（同質集団）を作ることもある。 <p>【F 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>固定の学習班（異質集団）を用いることが多い。</u> ・課題によってはときどきできそうな技に挑戦する場所別グループ（同質集団）を用いることもある。このとき、グループのメンバーは流動的である。 ・グループを組むときは男女の壁を取り除くことを目的に、<u>男女混合に組むようにしている。</u> ・<u>リーダーシップを発揮することが多いのは女子で、男子はその女子についていくことが多いという印象を自分のクラスに持っている。</u> <p>【G 教諭】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・<u>ほぼ全て一斉、班別学習を行ってきた。</u> ・班別学習の際は、<u>背の順をもとにした班（異質集団）を用いている。</u>

の教師とで発言内容に違いが認められた。すなわち、小集団での学習を行う場合、A、B、Cの3人の先生は、目的別、課題別、能力別などの違いに応じた学習集団を編成していたのに対して、D、E、F、Gの4人の先生は、出席番号や背の高さに基づいて班を編成していたのである。

A、B、Cの3人は、異質集団だけに固執するのではなく、等質集団も積極的に活用して、子どもたちの多様な学びを保障しようとしていたのである。このように学習集団を多様に活用することで、子ども同士の関わり合いが広がるとともに、いろいろな学習での話し合い活動において、相手の見方、感じ方、考え方などの違いを理解する機会が保障されたことで、結果的に子ども同士の人間関係が育ったのではないかと考えられる。

これに対して、グループを出席番号や身長といった形式的にグループを編成した学級では、学習集

団の固定化が起り、いつも同じ仲間との話し合いに終始したことで、結果的に特定の仲間との間でしか人間関係が育たなかったのではないかと考えられる。

また、態度測定の結果において、男女の診断に違いが認められた学級では、男女別の班編成の仕方、男女で運動技能レベルの差、男女でのリーダー性の発揮の仕方の差異などの影響が考えられた。しかしながら、A、B、C学級では、そうした要因が顕在化していない。加えて、調査時期が二学期終盤であることからすれば、4月以降の学習において、A、B、C学級の先生が多様な学習集団を編成し、グループ学習を継続してきたことが、影響したのではないかと考えられた。

Ⅲ まとめ

今回の取り組みでは、協力を得られた小学校の先生7名に対して、態度測定の実施と学習集団の編成の仕方についての聞き取りを行った。

その結果、態度得点の学習集団に関わる意見項目の診断が男女とも「標準以上」に高いレベルにあった学級の教師からは、異質集団と同質集団を使い分けて、小集団学習を展開していたことが伺われました。これに対して、そうでない学級の教師は、学習集団を固定化する傾向にあり、その編成の仕方についても名簿や身長といった形式的な編成の仕方を取っていたことが伺われた。

今回、教師の学習集団の編成に関する考え方と態度項目の診断結果を対応させて、その因果関係を検討することは乱暴である。

現在、異質集団での学びへの過信と等質集団への懐疑(差別や偏見に繋がってしまうのではないか)によって、異質集団に偏っている現実がある。今回の結果は、そうした現実に対して、現場から一石を投じるものである。

今後、それぞれの学習集団の機能的な活用のあり方について実践を積み重ねながら、さらに検討していきたい。

(注)

- 1) 態度測定研究は、文献1)にあるように、小林が「体育授業に対する愛好的態度を育てることが授業の基底である」とする考えから、体育授業に対する愛好的態度を測定する態度尺度が開発され、その後の研究により、体育授業を診断する評価としての地位を確立した。その態度測定研究を主導してきたのが梅野である。梅野らの研究をすべて紹介することはできないため、今回はその端緒となった論文のみを文献3)として掲載する。

(参考文献)

- 1) 小林篤(1978) 体育の授業研究, 大修館書店, pp.170-222.
- 2) 菊池博文・梅野圭史・後藤幸弘・林修・野田昌宏・辻野昭(1989)「体育科の授業に対する態度と学習集団機能の関係—中学生生徒を対象にして—」.スポーツ教育学研究,9-2:65-75.
- 3) 梅野圭史・辻野昭(1980)「体育科授業に対する態度尺度作成の試み—小学校低学年児童について—」, 体育学研究, 25-2:139-48.